

クロナ視点で論じることが主流」となっている現代のハラール問題の硬直的な解釈を指摘している(139-140頁)。

ハムルに続いて、第2節では豚肉の禁止について、ハムルとは違い最初から全面的に禁止されていたとして、その法的典拠とその解釈について触れている。第3節ではイスラーム式のと畜や食肉方法について、法的典拠やジャーヒリーヤ時代からの慣習もあるが、「グローバルで統一的な食事規定が構築」されていることの重要性を指摘している(159頁)。

第4章は、イスラーム経済が20世紀から形成された過程を、古典的な典拠ではなく、現代的な法解釈であるファトワーを中心に整理している。現代のリバー論争について、19世紀以降に西洋型の経済がイスラーム世界に浸透することに抗う「反イスラーム的な要素の排除」を中心とした議論が展開され、イスラーム経済の目的に関する視点が抜けていると批判している(190-191頁)。同様にハラール産業についても「インドネシア味の素」事件やワクチンやアルコール成分をめぐる議論をもとに、ハラール産業において古典的な解釈をもとに、化学成分を分析しているために、歴史的なハラールの解釈と現代的な理解が乖離している状態にあると指摘している。

結論では、本書の位置づけとしてイスラーム経済論やハラール産業を分析するにあたり、「総合的コンテクスト分析」と地域研究におけるイスラーム学の新たな方法論として「ヌズム論」を提案したことを確認している。評者としては、法的典拠の規定だけでなく、なぜ禁止事項となったのか、歴史的な背景などをもとに、イスラーム世界が目標とする社会を実現するためにどうすべきなのか今後研究を進展することを期待している。

本書は、結論でも述べられている通り、イスラーム経済論やハラール産業の実態と目指すべきイスラーム社会を示す新たな分析方法や視座を提供したと評することができる。特に、日本で初めて「啓示の契機」を紹介し、独自の「ヌズム論」からイスラーム世界を分析する方法を示した意義は大きい。

本書のもう一つの意義は、イスラーム世界の経済活動を幅広く理解し、イスラーム経済学の中でもイスラミック・モラル・エコノミーにも通じるという点がある。本書でも登場する英国ダラム大学のメフメット・アシュタイ教授が、イスラミック・モラル・エコノミーの提唱者である。メフメット教授は、「イスラームの正義と価値観が欠如している」とし、従来型金融と競合するためにイスラーム的な要素が欠如しているイスラーム金融の実践を批判している[川村 2021]。法的典拠の一部を切り取って、現代の事象を解釈することに傾倒していると「序章」でも先行研究に対して指摘しているが、イスラーム経済が現代において、どうあるべきなのか明示されず、本書のリバー論争でも取り上げられているように、硬直的な議論が中心となっていることは疑いを入れない。本書では、この本来あるべきイスラームを体現する制度を再構築するための知見を提示しており、イスラミック・モラル・エコノミー論への貢献も期待できる。

最後に、著者のハシヤン・アンマール氏が日本語で本書を仕上げるにいたった功労を称えたい。アラビア語での法学的な分析手法を検討するにあたって活用したアラビア語の法的概念を、日本語で端的に説明するためにかけた労力は計り知れない。

<参考文献>

川村藍 2021 「イスラーム金融とその民事紛争解決における法の変容と価値の創出——イスラームの公平性と正義の実現への模索」『立命館アジア・日本研究学術年報』2, pp. 59-65.

(川村 藍 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任助教)

Basem Mahmud. 2022. *Emotions and Belonging in Forced Migration: Syrian Refugees and Asylum Seekers*. Abingdon: Routledge, 210 pp.

2011年のシリア内戦勃発以降、シリア難民問題は移民・難民研究の分野で広く取り扱われてきた。特に2015年前後の「難民危機」は、ホスト国の国家の基盤や地域的安全保障を揺るがすような事態に発展し、国

際社会の注目を集めた。シリア難民問題に関する研究はホスト国の政策分析に偏りがちであるが、本書は「感情(emotions)」の側面からシリア難民の定着化のプロセスの理論化を試みる、非常に意欲的な研究書である。

まず特筆すべきは、著者のパーセム・マフムードの経歴である。彼自身がシリアの出身であり、父親がかつてシリア政府によって連れ去られ、「人間の屠畜場(human slaughterhouses)」(軍事刑務所のこと)で亡くなったことが、本書の献辞の中で言及されている。マフムードは2002年にスペインに亡命し、グラナダ大学で学生生活を送った。さらにドイツのベルリン自由大学において社会学の博士号を取得しており、現在はグラナダ大学の研究員を務めている。本書は著者の博士論文のデータをもとにして執筆された。

本書は序章と終章を含めて7章構成となっている。

序章

第1章 強制移動民の感情と帰属の研究

第2章 阻まれる希望

第3章 フラストレーションと「最終的な」移民計画の誕生

第4章 旅の間の感情と自己呈示

第5章 帰属への道筋——「『ここ』で新しい生活を始めることができると私は願っている」

終章

本書の特徴は、シリア難民が故郷から第一次庇護国、そして第三国へと移住するプロセスを、「故郷にいたいこと(At home)」、「過渡期(In-between-homes)」、「新しいホームの形成(Home building)」の3つのフェーズに分けて論じている点にある。著者は、この3つのフェーズがあることによって強制移動民を自発的移動民と区別できると指摘する。つまり、強制移動民は自発的移動民と異なって、故郷を喪失し、そこに戻ることが叶わないまま、目的国において新しい生活を構築することを経験する。本書は、難民の感情という側面からこの3つのフェーズを分析するものである。

序章では、著者が強制移動と感情の関係に関心を抱いた経緯について述べられている。著者は、メディアなどにおける議論がホスト・コミュニティのニューカマーに対する感情に注目する一方で、庇護申請者自身の感情は注目されてこなかったことを指摘する。このことから著者は、迫害が始まった母国から移動の目的国に至るまでの、それぞれの場所における強制移動民の感情と帰属意識の形成に関する問いが浮かんだという。つまり、「強制移動において、どのように感情(emotion)は帰属(belonging)に影響するか」という問いである。本書は、ドイツの首都ベルリンに居住するシリア出身の庇護申請者33名(男性22名、女性11名)へのインタビュー調査をもとに議論を進める構成となっている。

第1章では、感情と帰属に関するそれぞれの先行研究を検討し、これらの語の定義を再考している。著者は、強制移動民の生活の感情的側面を研究するにあたって3つの主要なアプローチが存在すると指摘する。1つ目は、日常生活を調査し、人々が自己の周囲の世界にどのように意味を与え、それを再解釈し、彼らの経験から意味をもたせるかなどの問いを生み出す日常的な出会いを研究するものである。2つ目は、トラウマの結果などに着目する治療に関する研究である。最後に、特定の出来事に着目する非日常を扱う研究である。先行研究は後者2つに多く、そこで描き出される難民は「馴染みのない」、「トラウマを抱えた」人々として表象されているという問題がある。これを乗り越えようと、著者は難民の経験の理解のために帰属と感情という概念を使用する。帰属という語は様々な意味で用いられることが多い。著者は、この帰属の語を3つの主要な定義に分類している。まず1つ目の定義は、帰属とは「適応し受け入れられていること」であるとする。2つ目の定義は、帰属をアイデンティティの構築に関わるような「自分たちが誰であり何であるのかにとって根本的なもの」として捉える。最後の定義は、帰属を「家にいる(くつろいだ)感情」とする。一方で、感情という語については先行研究において6つの理論から検討されてきたと著者は分析する。すなわち、(1)文化理論、(2)シンボリック相互作用論、(3)権力と地位に関する理論、(4)交換理論、(5)儀式に関する理論、(6)実践理論があり、本書の扱う感情という語はこれらすべての理論に関係するものである。

第2章は、「新しい生活」における希望とはなにか、という点から議論が展開されている。「とある場所で

の新しい生活の希望 (new-life hope in a place)」について、著者は「尊厳の認識」、「強調された感情の知覚」、「法的地位」、「物質的満足」という4つの性質があるとする。チュニジアで、エジプトで、そしてシリアで「アラブの春」運動が始まった時、そこには新しい生活が始まるという希望が生まれたことが、本章ではシリア難民の語りから示されている。ここでの「新しい生活」とは故郷 (At home) における生活の改新を指す。しかし周知のように実際には、シリアでの民主化運動がうまくいかずに内戦へと発展すると、人々の生活は脅かされ、別の場所への逃避が強いられることとなった。新しい生活への希望が潰えたとき、人々は移住を決意する。この一連の流れを、著者はシリア難民の語りを引用して詳細に描き出している。著者によると移住とは、新しい生活を始めるという希望が芽生える場所を探すことであり、新しい生活の希望がある場所を探すことであると説明される。著者は、2011年の民主化運動の始まりからシリア政府による化学兵器による攻撃があった2013年8月までを「新しい生活への希望があった期間」と位置付けている。

続いて第3章は、故郷を離れた後の「過渡期」におけるシリア難民の感情を論じている。過渡期は、人々が故郷に戻るか新天地で生活を始めるか選ぶまで続く。著者は2013年後半から2014年前半までを「失望の期間」と呼んでいる。シリア難民の失望には、シリア内戦に対する国際社会の対応への大きな落胆が含まれている。過渡期にいる人々は、無力感とフラストレーションを高めていく。その中で、最終的な移動が計画されると著者は指摘する。

本章の中のシリア難民ハマドの語りを引用すると、「ここでの私の人生はカオス、カオス、カオスであり、そこに未来はない。私は家の中に座り、地図を広げ、そしてドイツに行くことを考えた」(p.71)。彼はすでにトルコに移動していたが、ヨーロッパで新生活を始めることを決意した。移動を後押しする要因として、著者は(1)安全な場所を探すこと、(2)戦争への参加の拒否または軍からの逃亡、(3)厳しい生活状況からの逃避、(4)安心できる雰囲気への追求、(5)より良い未来への追求、(6)恐怖や鬱、悲嘆、不安などの感情をコントロールするため、の6つを挙げている。

第4章では、強制移動の行程における感情の揺れ動きが論じられている。本章で興味深い点は、著者がマトリョーシカに例えている難民の自己呈示の様相である。ここでの自己呈示とは、強制移動民が移動の途中で様々な「自己」を表現して振る舞う様子を指す。例えば、本章で引用されているムスタファの語り(「我々はどうぞをついた、シリア自由軍には我々はシリア自由軍と共にあると言い、小麦粉を求めた。体制側には我々は彼らと共にあると言い、何かしらを要求した。(中略)このようにしなければ、誰もパンを食べることができない。」)からは、このような自己呈示が生存戦略となっていることが明らかである(p.88)。容姿が「白人」のようであることも、シリア難民の旅路を助けることがあり、著者は述べている。この事実は密航業者にも利用されており、密航船に乗せる難民の選別の基準になっていることが、イヴァンというシリア難民の語りから明かされている(p.93)。

さらに本章で指摘されている重要なポイントは、テクノロジーの発達と感情の関係である。携帯電話はいまや強制移動民と彼らを支援してくれるホスト社会の間のコミュニケーションを助ける大きな存在となっている。ヤスミンとアイマンの語りから、携帯電話によってホスト社会との間の通訳が可能となり、目的地にたどり着いたことがわかる(p.96)。さらに、テクノロジーの発達は新しい土地に親しむためにニュースを見たり言語を学んだりするツールとしても活用されていると、著者は指摘している。

第5章は、新しいホームを形成する段階において様々な行為が活用されていることをデータから示している。例えば、言語学習や郷土料理を作ること、グループ活動に参加することなど、本書の中では様々な事例が挙げられている。郷土料理を作ること为例にとると、料理はシリア難民にとって故郷を思い出し、故郷にいる気分を想起させるだけでなく、ホスト社会とのつながりを生み出すことが、難民たちの語りから明らかにされている。このような行為によって、難民たちはホスト国において彼らにとっての安心できて満足な状態を構築していると著者は言う。さらに著者は、「ホームにいる」という感情は4つの点から生み出されるとする。すなわち、(1)永続的に安全な場所、(2)歓迎されていると感じること、(3)ホームの構築、(4)その場所での主観的な幸福、の4つである。感情や感情的な実践は、ホームの形成段階の中心的役割を担っていると、著者は指摘する。

終章では、第1章から第5章までの概括がなされている。特に過渡期の状態にいる強制移動民は、食糧、住居、健康や家族と連絡を取るためのインターネット接続といった基本的ニーズを満たすことを求める。ひ

とたび庇護申請が認められ、これら物質的ニーズが見たされると、新しい場所で難民はホームの構築を始める。第5章で述べられたように、言語学習や郷土料理を作ることなどの行為は感情のマネジメントと結び付いている。つまりこうした行為は、感情を管理することが保護的問題からホームにいる感情の構築へと変化するプロセスなのであると著者は主張する。感情と帰属の相互作用を病理学的あるいは治療的なアプローチを超えて分析し、理論構築を目指した数少ない研究であると著者は本書を位置づけているが、首肯できる。さらに本書の研究は、宗教社会学、価値の社会学、そして感情の社会学における重要な観察結果を提供していると述べている。

以上、各章の内容を概観した通り、本書はシリア難民の語りから難民の移住プロセスを論じ、新たな理論の構築を試みている点に最大の意義がある。著者は、「故郷にいる」状態と「過渡期」にいる状態においては、基本的ニーズと新しい生活における希望を探すことを求める状況にあり、「ホームの構築」過程に入ると望んでいるものを求める状況に移行すると述べている。このように、難民の感情の揺れ動きをインタビューから捉え、それを各移住プロセスのどの部分にあたるのかを分析し、感情と帰属の関係性について明らかにしている点は、同じくシリア難民の帰属について研究している評者にとっても、非常に興味深い。さらに、本書に引用されているシリア難民の語りは、著者自身もシリアの出身であるためか、非常に率直で示唆に富んでいる。これらの語り自体にも大きな価値があると考えられる。また、著者は帰属や感情、希望、場所といったキーワードを使用する際には、丁寧な先行研究の検討と定義づけを行っており、その点も高く評価できるだろう。

一方で、「インフォーマントの語りから理論を構築する」という手法は本書の特徴であると同時に、課題も抱えているように感じられた。本書では難民の感情を幅広い範囲で捉えようとするあまり、理論ありきで難民の言説を当てはめているのではないかと批判される余地があると思われる。さらに、新しい理論を構築するにはインタビュー対象者の母数が少ないのではないかという指摘もあるだろう。

とは言え、これらの点は本書が挑戦した新機軸の価値を損なうものではない。難民の帰属や感情という側面から明らかにしようという著者の試みは、これまでの帰属の研究にはない新しい視点であり、移民・難民研究の更なる発展につながるものである。上記でも触れたが、本書のシリア難民の語りからも学ぶところは多々あり、難民研究者のみならず中東地域研究者にもぜひ一読をおすすめしたい。

(望月 葵 立命館大学立命館アジア・日本研究機構専門研究員)

帯谷知可『ヴェールのなかのモダニティ——ポスト社会主義国ウズベキスタンの経験』東京大学出版会 2022年 v+255+27頁

本書は、ウズベキスタンにおけるムスリム女性のヴェール着用をめぐる言説の変遷を検討することにより、同地域において19世紀後半以降どのような形でモダニティが追及されてきたのか、その軌跡を文献資料研究と現地調査の手法を用いてたどった一書である。なお、ここにおけるモダニティとは、「一般的な定義として、それを西洋的なものに限定せず、現代に見合った、人間がよりよく生きるための規範や価値観の総体」(p.18)として、広い意味で用いられている。著者は、同地域において「目指すべき近代的な生活や社会のあり方」(p.2)がムスリム女性のヴェールをめぐる議論に常に反映、象徴されてきたと指摘しており、それゆえにモダニティのあり方を明らかにするためには、ヴェールをめぐる言説に着目する必要があると述べる。

ムスリム女性のヴェールが政治的に問題化される傾向のある現代において、「イスラーム・ヴェール問題」を対象とした研究が多く存在するなか、本書はイスラーム・ジェンダー研究および「『ヴェールの政治学』の潮流」に立脚する立場をとっている。よって、本書の要約に入る前に、筆者の先行研究整理にならないながら、これらの研究について簡単に述べたい。

まず、イスラーム・ジェンダー研究においては、ライラ・アハメドによる植民地期におけるムスリム女性の表象にまつわる議論が参照されている。アハメドによると、19世紀後半にヨーロッパが中東を植民地化